

鴻 koh

月刊俳句誌

令和元年10月1日発行
（毎月1回1日発行）
第14巻第10号 通巻160号

10_{月号}
2019



園

ひんがしに西に菜殻を焚くけむり

八朔の瀬へ笹舟を押し出だす

ででむしに雨の来てまた雨の来て

畝傍耳成精霊とんぼ風となる

水に明け水に暮れゆく螢沢

走馬灯とは夕風のやうなもの

野地蔵に村人がくる鶉がくる

蔵王堂までの坂道かなかなかな

八月の瀬音に戻りありにけり

胡椒播り潰し広島忌の夕べ

鎌倉五山斑猫のよく振返る

蚊帳吊草たつぷりと雨来てゐたり

月光が降る曼陀羅となりて降る

精霊とんぼ

主宰作品

増成栗人

鴻 作品抄

文芸誌の四コマ漫画木槿咲く

横尾かな

雲の峰バックミラーを見るたびに

足立枝里

ほうたるの闇に鼓動のありにけり

待場陶火

蟻巻と根気比べをしてゐたり

草柳 忍

下駄鳴らし愛染さんの駕籠につく

林 未生

味噌付けて胡瓜を齧る我鬼忌かな

伊藤啓泉

ゆふどきのこゑはわらんべ振り花

佐藤あさ子

時の記念日 四阿の緋毛氈

佐藤慧美子

芭蕉布の糸の結び目風微か

井上つぐみ

沙羅の白とは思春期のままの白

中島 宙

曝書して紙魚跡残る和綴本

小林和子

嬰の手に笑窪が三つ夏となる

深川峰子

海開く白き木椅子を海へ向け

緒方七星

一草にまだ濡れてゐる蟬の殻

伊藤真代

錯簡(さっかん)の和綴ぢの句集涼しかり

三代川朋子

雑記帳のきれいなページ夜の短

鈴木 崇

ポストまで誰にも会はぬ酷暑かな

鈴木芙美子

漱石の句碑 春秋や蟬時雨

本田豊明

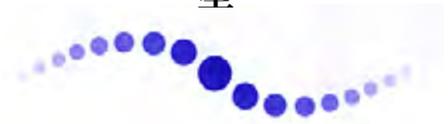
ピザ焼きあがる天の川長くなる

北村 操

乳を欲る木曾の仔馬よ遠嶺晴

岡 杜詩

荒川心星



落し文

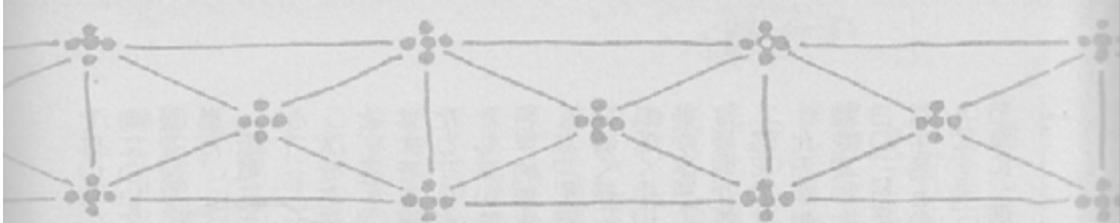
重畳と山風鈴の鳴りづめに
飛鳥路の寺の日向に落し文
まつさきに麦秋となる麓村
睡蓮の水面にありし日の欠片
向日葵の真昼の黙を通しけり
かたまつて青蘆原へ鳥が降る
大和まほろば朱の鮮やかな花石榴
香具山の平らかな日の袋掛

白南風や水先船の船溜り
突堤の二号三号油照り
空つぽの大観覧車広島忌
目高の子生まれるたびに鉢増やす
牛乳を買ひに出るとき日雷
信号を待つに小さな片かげり
ものかげの移りてゐたり昼寝覚め
雄鶏の鋭き蹴爪夏終る

白南風



半谷洋子



第五回「鴻」俳句賞

入選

第一位	「棹の音」	林 未生
第二位	「冬枯れの樹」	山岸 明子
第三位	「蛙の目借時」	安食 哲朗
第三位	「吾も修羅」	森 祐司
第五位	「春北斗」	花本 智美
第六位	「木菟の夜」	待場 陶火
第六位	「駅」	足立 枝里
第八位	「左見右見」	伊藤 隆
第九位	「渡良瀬」	相川 健
第十位	「冬紅葉」	鈴木 崇
第十位	「春の潮」	田邑 利宏

谷口摩耶



盆の寺

鴻司木槿に飴色の蟬の殻
少年の両手に掲ぐ兜虫
野沢菜をざくざく刻む今朝の秋
をさなごの跣が走る盆の寺
木洩日に育てられたる梨を剥く
高足の硝子の皿にマスカット
夏休みの終りに抜けし乳歯かな
さりさりと幸水を食む月の夜

第五回「鴻」俳句賞

選評

増成菜人主宰 選

- 一位 冬枯れの樹
- 二位 春北斗
- 三位 渡良瀬
- 四位 春の潮
- 五位 木菟の夜

「冬枯れの樹」

シャガールの青海の青夏に入る
ゴッホの絵見しあとの黙星月夜
いつ見てもいつも悲しき冬酉

冬枯れの樹よ老ひもまた佳きものか
二十句中の二句三句が傑出する作品より、二十句の競詠だけに、この一篇を通しての作家の呼吸が伝わる作品を探ることにした。「ゴッホの絵」いつ見ても」の句にあるように、己がロマンを十七音の対象に溶け込ませてゆく姿勢の中に美しき作者の詩質を覗かせている。固有名

詞の多さが若干の気懸りだが、それが上手に季語と照応して、作品に幅を持たせていることにも注目。

「春北斗」

父の茶にとろみをつけて花の冷
花吹雪水の一字ある墓石
クレパスの青だけ減りて夏の果

線書きのレモンが二つ夜の秋
人の暮らしには喜怒哀楽がある。それを作者は己がプラス思考で、己が快き眩きとして詠い上げていることに注目。ためにこの一篇には夢がある。最後の六句は甘さが目立つ。しかし包み込んでくる作者の世界が、読み手と同じ息遣いに導くような寧ろさがある。

「渡良瀬」

ゆふぐれの来て山菜実の花明り
春すみれ妻にも夢の二つ三つ

紅椿葉に触れもせず落ちにけり
潮騒の聞こゆる路地の額の花
一句一句の完成度の面から評価するならば「渡良瀬」が一番すぐれている。ただ若干、従来俳句手法が抜けきれず、対象の把握に今一つ個性が見えず、残念ながら三位に推した。丁寧美しく詠われていて、流れるようなリズムにも魅力を感じた作品であった。

「春の潮」

菜の花のペペロンチーノ安房の海
囀りのこぼれて野外音楽堂
星月夜フルートの音のよく通る
被災地に月日も雪もふりつもる

総体的にこの作品も出来ているが、実景句と感覚の作品、観念句が混然と入り混じり、作家の姿勢が見え難い点が惜しまれる。己が姿勢を決め、腰を据えて対象に向かうならば大きく成長する作家ではないかと考えている。

「木菟の夜」

噓き燗の残れる窓に入る
三日目の朝の攻め焚き雉子鳴く

雲峰仰天



第10回亀戸書会は、無事終了しました。

9月7日13時半から16時半までの約3時間、亀戸文化センター6階美術室にて、7名の方が自分らしい篆書作品を作りました。

篆書は、絵のような説文のような不思議な形をした書体です。また、漢字のルーツをたどることができ、人間は太古の昔より変わらぬものがあるのだと気づかせてくれる文化遺産です。

篆書の筆づかいは独特のもので、二重書きをしたり、絵のように塗ったりします。

書き順は、明確なものがないので、私が自由に書き出すと、「え？ そんなのでいいの？」などという声も聞こえてきました。

紙は、表側で書くことが多いのですが、書会ではざらざらした裏側で書いていただきました。なぜ裏側で書くのか、お分かりでしょうか。

今回の「望雲之情」の作品は、七人七様で、その人のお人柄や心境を表しているようでした。

作品の批評は、「良い所さがし」から始めると、互いにやる気が出て、前向きな議論や提案が生まれます。雲峰の批評のあとに、参加者の皆さんのコメントがとても前向きで明るいものだったのが印象的でした。

篆書は、書の心得の有無に関係しないところで、コミュニティを作り上げる不思議な力のあることに気づかされた第10回亀戸書会でした。



楽庵閑話 16
 虫丸

句会で一句の中で動詞をいくつも使わないようにと言われましたが…

内容を説明する動詞が重なるると報告的な句になりがちなんだ

俳句の独自性が断節による間から生まれる飛躍にあるとすれば

その「間」は説明によつてではなくイメージの力でつなごうということだ

単独では点でしかない星と星の空間をイメージでつなげて星座や神話まで想起させることと俳句の手法は似ているかも

言葉でつないだ星座が俳句なんですね

ボクの中の頭の中の言葉は流れ星ばかりで星座にならないみたいですね



羽音集

増成栗人 選



初物の鮎のほどよき塩加減 平塚 草柳 忍
 青虫のまんまるなるをつつきぬる
 蟻巻と根気比べをしてゐたり
 挿木せし鉢の薔薇の真くれなる
 たつぷりの薬味をのせて冷奴
 時の記念日四阿の緋毛氈 さいま 佐藤慧美子
 梅雨冷やアイラインと眉引き直し
 スカートの丈短めに暑気払ひ
 アートなりや落書なるや半夏生
 海の日やチーズまみれのピザを食む
 寺町を切り絵のごとくはたた神 船橋 藤原明美
 冷し酒漕の青さを掬ひあげ
 城山の影の被さる花菖蒲
 薬棚の鍵の点検梅雨月夜
 偏頭痛より解き放たれて草の笛
 演者なき能楽堂の蟬時雨 稲城 本田豊明
 あぢさゐの白の極まる寺領かな
 漱石の句碑春秋や蟬時雨
 後の世の測り難しや蟬の殻
 郭公の鳴き声止まぬ真昼街